夏のモンブラン

城南中学校　三年　瀬戸　ことね

みなさんは、「夏」という単語を聞いて何を思い浮かべますか？夏休み、プール、お祭り、部活の大会、人それぞれ連想するものは違うと思います。私は、「夏」と聞いて真っ先に、黒い額縁で微笑む祖父を思い出します。私の祖父は、私が生まれる約二ヶ月前の真夏に亡くなりました。六十二歳の誕生日を迎えてすぐだった祖父は、入院してから二週間という速さで急逝しました。あまりの展開の速さに、祖母は看病していた記憶があまりないと、当時を振り返って話してくれました。それと同時に、祖母は祖父が早く病院に行かなかったことについて深く後悔しているようでもありました。

祖父は、肝硬変という肝臓の病気で亡くなりました。肝硬変とは、肝臓に長く炎症が起きることで肝臓が硬くなり、血液の流れが悪くなる病気です。祖父は肝臓の炎症に続き、腎臓の機能も低下し、最後に心臓が弱くなっていきました。肝硬変になる原因は、主に肝炎ウイルスに感染することですが、アルコールの過度な摂取やストレスなどでも引き起こされることがあるそうです。祖父は四十二年という長い間、印刷局で働いていました。印刷局とは、紙幣を印刷する工場のことです。印刷局は三交代制と呼ばれる勤務体制で、三つの動きを一週間ごとに替えて行うものです。この三交代制で一番大変だったのは、夜に出かけて朝早くに帰ってくる、いわゆる夜勤と呼ばれる仕事の週でした。子どもたちが寝付く時間に一人で工場へ向かい、朝まで仕事をして帰ってくる。夜のために寝ようとしても、明るくて寝られない。家族とずれた変則的な生活リズムの中で、祖父の自律神経は乱れ、無意識のうちにストレスが溜まっていたのではないかと、母が教えてくれました。また、祖父がお酒好きで、よく飲んでいたことも原因の一つだと考えられます。現在、肝硬変は治る病気になりつつありますが、完治するには早期発見がとても大切です。祖父が入院したときには、既に末期と言われる状態で、医師から「長くはない。」と言われたそうです。点滴などの治療をして、病状の改善を待ちましたが、良くなることはなく、ただ死を待つようにして約二週間の闘病生活を送っていたそうです。祖父は、病院の中で誕生日を迎えました。その少しあとから、話すことも食事もままならなくなり、寝たきりの生活になりました。祖母は病院側が用意してくれた簡易ベッドで、夜通し祖父の傍に寄り添って看病をしました。祖母と最後の会話をしてから四日後の真夜中、祖父は祖母に看取られて息を引き取りました。実は、亡くなるかなり前から、祖父は健康診断で肝臓の機能が弱っていると指摘されていたそうです。ですが、頑なに祖母達に診断結果を見せることをせず、職場のロッカーにしまって自宅

に持ち帰ってはきませんでした。そのことを聞いた祖母は受診することを勧めたそうですが、祖父はそれを断り、段々と病気に蝕まれていったのです。

私は祖父の話を聞いて、健康診断や、自分の体の変化に気がついたらすぐに受診することの大切さを痛感しました。定期的に受ける健康診断で病気の早期発見ができれば、一秒でも長く幸せな時間を過ごすことができます。もし、祖父がもっと早く受診していたら、長生きして大好きな旅行に私を連れて行ってくれたかもしれません。私は祖父に会ったことがなく、こうして祖父の話を詳しく聞くことも初めてでした。いつも命日になると仏壇の前に供えられる、祖父の好物のモンブラン。今年も祖母が買ってきたモンブランを家族で食べました。大切な人達のためにも、自分のためにも、今、健康のためにできることに、少しずつ取り組んでいきたいと思います。